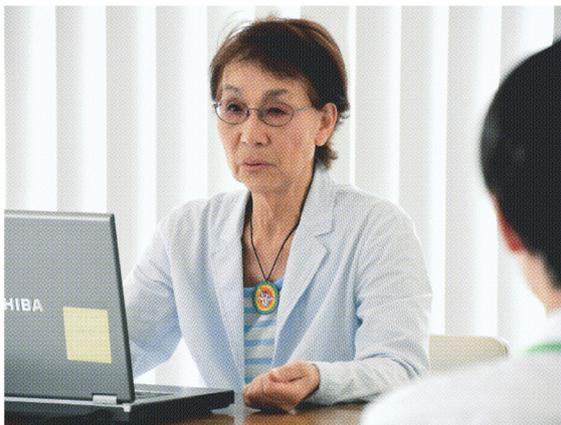


「被爆者には伝える責任」

岡田さん、癒えぬ苦しみ 「ヒロシマ講座」で証言

とちぎ
平和を
考える
ヒロシマから



目にうっすらと涙を浮かべ被爆体験を語る岡田さん=29日午後、広島市

夕焼けで真っ赤に染まった空を見るたびに「あの日」の凄惨な体験がよみがえる。広島市で始まった国内

ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」2日目の29日、8歳で被爆した同市の岡田恵美子さん(80)が忘れられぬ光景と癒えぬ苦しみを語った。

72年前の8月6日朝は青空が広がる暑い日だった。空襲警報が解除され、自宅で家族と朝食を取っていた次の瞬間。「ピカッ」。閃光と同時に小さな体が吹き飛ばされた。窓ガラスの破片で母は血だらけだった。

至る所で火の手が上がり、「真っ赤な空から炎がすさまじい勢いで追い掛けてきた」。大人も子どもも目の前で死んでいった。足の踏み場もないほどの無数の遺体は「まったく人間らしい姿ではなかった」。当時を振り返る岡田さんの目にうっすらと涙が浮かんだ。

数日たってようやく火災が収まると、辺りは一面焼け野原。はるか先に瀬戸内

海が見えた。その美しい青さは、目の前の地獄のような光景を際立たせた。建物疎開に出ていた姉は、今も戻らない。

「被爆者は経験を後世に伝える責任がある」。現在、被爆体験を語るピースボラントニアとして活動する岡田さん。2015年には被爆者として初めてノーベル平和賞授賞式に招かれ、被爆体験を説明した。「国や肌の色が違おうと対話が平和の原点」と断言する。

今月国連で「核兵器禁止

条約」が採択されたが、日本は参加していない。「被爆者には時間がない。核廃絶を実現するまで声を上げ続ける」と力を込めた。

(佐野恵)